

学習支援センター 英語 FAQ

Q1. 大学に入学してからも「英語」の講義があるのですが、理工系の大学において英語の学習が重要である理由を教えてください。

(アドバイス)

確かに、ほぼすべての人たちが高等学校まで英語を学習してきているものと思います。だからひょっとしたら、「さらに大学で勉強することがあるのだろうか?」、「理系の大学なので英語よりも数学や理科のほうが大事なのではないの?」と思う人もあるかもしれません。では、大学でさらに英語を学習する意図はどこにあるのでしょうか。

高等学校までの英語学習は言ってみれば「さまざまな場面や進路に対応できるための総合的な英語を学習」してきたということになるでしょう。一方、大学での英語学習は「個々の専門分野に関わる内容について、読む・聞くなどの手段で深く理解したり最新の情報を得たりする、書く・話すなどの手段で自己の考えやアイデアを発表・伝える、といったような特定の専門分野と結びついたコミュニケーション・ツールとしての英語を学習」していくということになります。したがって、言語としての英語そのものは変わりませんが、どのような目的のために英語を学習するのかということが変わってくるようになります。つまり、大学で学習する英語とは、暗闇を進むときに必要となるライトのようなものと言えるかもしれません。

近年、ナノ・テクノロジー、iPS 細胞、小惑星探査機での試料採取など、さまざまな最新の科学や技術に基づく研究が脚光を浴びていますが、そういった情報は主として英語による論文を各専門分野の学術誌に発表するという形でまず世界中に知られることとなります。さらにそれがインターネットなどのさまざまな伝達媒体を通して取り上げられたり、それを応用した商品などが開発されたりすることでより広く知られていくことになっていきます。そうすると、もしその最新情報をできるだけ早く得るためには英語で書かれている文章を読み解くことが必要ということになります。このように、大学で英語(および諸外国語)を学習するということは数学や理科の学習を進めていくことと同じくらい重要なことなのです。

Q2. それでは、どんな勉強のしかたをすればいいのですか。

(アドバイス)

先程も触れたように、英語そのものについて変わるわけではありませんので、学習を進めていく土台となるのはこれまでの英語学習によって培ってきた英語に関する知識や技能です。したがって、これまでの学習において苦手な分野や理解不足の分野があるのであれば、必ず補強していく必要があるということになります。このことを踏まえた上で、さらに大学では特定の専門分野と結びついたコミュニケーション・ツールとしての英語を学習することになるので、それに沿ったポイントを重点的に学習していくこととなります。いくつか実際に必要と考えられるポイントを挙げると、「時と動詞の関係」、「仮定法表現」、「関係詞」、「比較表現」といった文法事項や表現方法がそれに当たります。また、これから読んでいくことになる英語の文章は論理構成を主とした説明文ですが、そのような文章を読むために必要となる知識(論理構成の組み立て、語彙など)

もやはり重要です。ちなみに、今いくつか列挙した項目について、実際に多くの学生が学習支援センターへよく質問に訪れてもいます。これらのいくつかについては Q. 3 で実例をもとに高等学校段階までで確実にしておくべきことについて触れていますので是非参考にしてください。

さて、本学では各自の英語に関する知識や技能に応じて習熟度別クラス編成を行っています。英語に関する知識や技能は人それぞれ異なります。そこで、特定の専門分野と結びついたコミュニケーション・ツールとしての英語を学習する上で各自の学習を進めやすいようにするためにこのような措置が採られています。積極的に講義に参加してぜひ自身の英語に関する知識や技能をブラッシュアップさせてください。

Q3. 今までどのような質問が多く寄せられていますか。また、その質問事項に関連して現時点でおこななければならないようなことは何かありますか。

(アドバイス)

今までにあった質問事項の事例をもとに特に勉強しておいたほうが良いポイントについていくつか紹介していくことにしましょう。

Q3.1. 時と動詞の関係

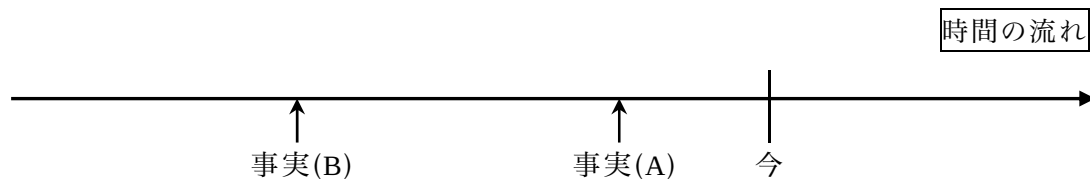
英語において、ある出来事がいつのことなのかを表す中心的な役割を担っているのが述部(核となるのは動詞)ですが、日本語よりも細かく分かれています。したがって、その概念を理解しておかないと、英文を正しく理解したり、自分伝えたいことを適切に伝えたりすることができなくなってしまうことになります。例えば、以下のような問題はどうか考えたらいいでしょうか。

[Question] 空欄に適切な語句を入れよ。

「昨日、Bob は以前買った車を私に見せてくれた。」
Yesterday, Bob showed me his car he _____ before.

[Answer & Explanation]

「買った」と言っているなので、動詞としては"buy" を使うことになるわけですが、そのまま空欄に入れられるわけではありません。この文には「ボブが私に車を見せてくれた」という事実(A) と、「ボブが以前車を買っていた」という事実(B) が含まれています。各事実の時間関係を整理してみると下図のようになります。



したがって、事実(B) は事実(A) よりも前の出来事であることを表すように空欄に

入る語句を考えなければなりません。それぞれの事実を伝えるだけなのであれば過去時制を用いればいいのですが、もし事実(B) を伝えるために"bought" で表したとすると、両者の時間の前後関係がわからなくなってしまいます。そこで、このような場合には過去完了という表現方法を用います。この表現方法は、主として「過去のある時点から見てさらに古い出来事である」ということを表すからです。したがって、"had bought" という語句を入れてやればいいことになります。

上記の例では一文を取り出したものですが、科学的な英文中では事実関係を重視するので上記のような英文に出くわすこともよくあります。しかも、この例のように関係代名詞で結ばれている場合には時間関係には一層慎重にならなければなりません。

では、次の問題はどうすればいいのでしょうか。

[Question] 空欄に入る適切な語句を選べ。

「もし明日雨が降ったら、競技会は延期します。」

If it _____ tomorrow, we will put off the competition.

(a) rain (b) rains (c) rained (d) will rain

[Answer & Explanation]

「もし明日雨が降ったら」と言っていますが、基本的には「雨が降る」という現象は未来の時点で起こるかもしれない事柄です。そう考えると(d) がよさそうですが、ここで用いられている"will" という助動詞には「～だろう」という今後についての予想という概念が含まれています。また、「もし明日雨が降ったら」とは「雨が降る」という事象が起こったという前提条件であるということに注意が必要です。前提条件には不確定要素が含まれる余地はありません。したがって、(d) は不適ということになります。では、未来の時点での内容であっても確定的なことを述べたいときにはどのような表し方が適しているかということ、実は現在時制がこの場合に適しています。したがって、(b) を空欄にいれればよいことになります。

科学的な意見を述べる場合には前提条件を設定して述べることもよくあります。したがって、どのような表し方が適しているのかを正しく理解しておく必要があります。上記のような問題についても、ひょっとしたら「規則だから覚えておきなさい」と言われて機械的に覚えていたかもしれませんが、実は表したい内容に対応する考えに基づいて適切な表現が選択されているわけです。場面に応じた表現が使えるようにしっかりと理解しておきましょう。

さて、時と動詞の関係に関わる用語の一つとして「時制」という言葉を聞いたことがあるかもしれません。この「時制」とは「表したい『時』に対応した動詞の活用形」と

理解しておくといいいでしょう。例えば、「現在時制」という動詞の活用形は「現在」という「時」に関わる内容を表したい場合に使われますが、先程の問題のように「未来」という「時」に関わる内容を表したい場合にも使われます。このように、「時」と「時制」とは別の概念ですので混同しないようにしておきましょう。

Q3.2. 仮定法

前項でも出てきましたが、科学的な意見を述べる場合には前提条件を設定して述べることもよくあります。その場合、「単なる前提条件を述べるだけ」なのか、それとも「あえて実際のこととはかけ離れたことを想定して述べる」のかでは、表し方を変えなければ区別することができません。そこで、後者は「実際はそうではないのだが…」とか「実際はまだそうなのではないのだが…」という気持ちが余分に加わっていることを示すために通常の場合とは異なる表現方法を用います。その表現方法が仮定法と呼ばれるものなのです。仮定法という表現方法でも重要な役割を担っているのは述部(主として動詞)です。では、以下のような問題について、あなたならばどうしますか。

[Question] 内容に合うように[] 内の動詞を適切な表し方にせよ。

Jack said, "Peter is not a good basketball player, but he acts as if he [be] a basketball hero."

[Answer & Explanation]

ピーターという人物についてジャックがコメントしている文ということになりますが、その内容は「ピーターときたら、バスケットボールはそんなにうまくないのに、スター選手気取りなんだ。」と言っています。さて、ここで大切なのはジャックはピーターのことを「スター選手のようなバスケットボールが上手な人ではない」と考えている点です。すると、if の後に述べられていることには「実際はそうではないのだが…」という気持ちが込められていると考えられますので、ここでは仮定法という表現方法を使うとそのような気持ちを表すことができます。この問題では「彼はスター選手である」という前提について「実際はそうではないのだが…」と考えているので、「be」という動詞を"were" という表し方にすれば仮定法という表現方法を用いた表し方となります。仮定法では、「実際はそうではないのだが…」と考えている前提の表す「時」と文全体を貫く「時」と比較して、同時期の内容と考えられるか、あるいは文全体を貫く「時」よりも古い内容と考えられるかで表現方法が異なります。

※補足ですが、ここで用いられている"as if 事柄 A" という表現は、本来は仮定法を用いた表現でした。しかし、現在の用法では「例を挙げる」という側面に重点が置かれるようになり、「実際はそうではないのだが…」ということを明らかにしたいのでなければ、仮定法を用いない表し方でも用いられることがあります。

上記の例のように、仮定法という表現方法では述部の表し方に注意が必要です。さら

に、仮定法で表される内容は仮想的なことを創作したものであるとも言えるので、現実の時間の流れにさほど縛られてはいないということにもなります。したがって、仮定法という表現方法の特徴的なことについてしっかりと理解しておく必要があります。科学においては、ある事象について仮説と検証を重ねることで真実と考えられる法則性を明らかにしていくわけですから、仮定法のような表現方法は必須であると言えます。

このほか、仮定法では設定された前提に対する帰結部分において助動詞が用いられますが、それらは主に予想、推測、推理などを表しています。本来、仮定法という表現方法には「実際はそうではないのだが…」という気持ちが含まれているので、帰結部分で述べられていることも「実現する可能性は低い」(または「確率的には起こりにくい」という含みを持っています。したがって、ここで使われている助動詞は気分的にはちょっと距離を置いたような雰囲気醸し出すこととなりますが、この雰囲気を婉曲表現として利用することがあります。こうした助動詞の使い方は日常会話などでもよく使われており、TOEICなどの資格・検定試験でも必ずといっていいほど登場します。仮定法とは一見関係がなさそうに思っていたかもしれませんが、背景にある考えをしっかりと理解しておきましょう。

Q3.3. 関係詞

英語などヨーロッパ発祥の言語の多くでは、語句を修飾する部分は一般的にはその語句の後に来ます。その修飾部分が語や句のレベルであればさほど困難は感じないかもしれませんが、節(主部と述部を持った一文と同じ構造を持つもの)のレベルとなるとちょっと勝手が違うと感ずるかもしれません。しかし、あることについてより詳しい説明をつけようとする場合には文を用いた方がわかりやすく誤解も避けられることになるでしょう。場合によっては文を用いた説明方法しかほかに手段がないといったこともあります。例えば、「私の本」という表し方と「私が昨日不思議な本屋で見つけた本」という表し方では、後者のほうが情報量が多いことはもちろん、文を使った表し方でしか「本」について説明をつけることはできそうにありません。したがって、このような場合に用いられる表現方法を適切に理解しておく必要があります。

科学の世界では、ある事物や現象を定義しなければならないことがあります。例えば「水は水素と酸素からできている物質である」というような場合です。この例では「水素と酸素からできている」という部分が「物質」を修飾している(説明をつけている)部分です。このような場合、修飾部分における連結器のような役割をするのが関係詞(関係代名詞・関係副詞)と呼ばれるものです。では、以下の問題を考えてみましょう。

[Question] 二つの文の内容を一つの文で言い表せ。

Water is a substance. It consists of hydrogen and oxygen.

[Answer & Explanation]

この二つの英文では、それぞれ「水が物質である」とことと「水が水素と酸素から構成されている」ことが述べられていますので、一つの文で表現するならば「水は水素

と酸素から構成されている物質である」と表せばいいと考えられます。

さて、二文めの "It" はもちろん「水(= water)」のことですが、これを言い換えた「その物質(= the substance)」と考えることもできます。そこで、一文めの "a substance" に対して説明をつけるという方向性で解決方法を考えてみましょう。まず、説明をつけたい語句と説明に使う文を以下のように並べます。

(Step A)

a substance
[] ? It (= the substance) consists of hydrogen and oxygen.

次に、共通部分を分かりやすくするため、二文め中の共通部分を [] ? に入れ、元の箇所は [] × とします。

(Step B)

a substance
[It (= the substance)] [] × consists of hydrogen and oxygen.
↑

さて、"It (= the substance)" は代名詞であり、二文め中では主語の働きをしていました。そこで、[] を "that" または "which" に置き換えます (Step C)。あとはそのまま横に並べてやると "a substance that [or which] consists of hydrogen and oxygen" となりますので (Step D)、全体としては "Water is a substance that [or which] consists of hydrogen and oxygen." ということとなります。この文の内容は「水は水素と酸素から構成されている物質である」となるので、目標とする文はこれでできあがったことになります。

修飾部分において連結器の役割をするものが関係詞といいましたが、説明に使う文中において関係詞に置き換わる箇所がどんなものなのかということが大切なポイントです。上記の例では(代)名詞の働きをしている部分が関係詞に置き換わる箇所だったので関係代名詞を選択することになります。また、(代)名詞は文中においては主語の役割を担っているので主語の役割を担うことができる関係代名詞ということになります。もし、これが副詞の働きをしている部分であったのなら関係副詞を選択することになるわけです。では、次の問題を考えてみましょう。

[Question] 日本語で示されている内容を英語で言い表せ。

「私の妹はフランスに住んでいるんだけど、来週私のところに来て一緒に過ごすことになっているんだ。」

[Answer & Explanation]

この日本語の内容を言い表す方法はいくつかあります。例えば、事実を列挙するだけであれば、"My sister lives in France and is coming to stay with me next week." と言い表せます。

また、情報の重要度を考慮する言い表し方も可能です。この場合では、「来週私のところに来て一緒に過ごすことになっている」という情報が最も伝えたい情報であって、「私の妹はフランスに住んでいる」という情報は補足的なものと考えられます。このような補足的な情報を述べる場合にも関係詞を用いることができます。基本的な考え方は前の問題の場合と同じですが、ただ一つ違うのは補足的な情報を挿入することになるので前後をコンマで区切る(この挿入部分で文が終わる場合は前方のみコンマで区切る)ということです。「来週私のところに来て一緒に過ごすことになっている("My sister is coming to stay with me next week.")」という内容の「私の妹」について、補足的な情報として「私の妹はフランスに住んでいる("My sister lives in France.")」を述べることになるので、"My sister lives in France" を"who lives in France" として"My sister" の後に挿入します。こうしてできあがった文は"My sister, who lives in France, is coming to stay with me next week." となります。

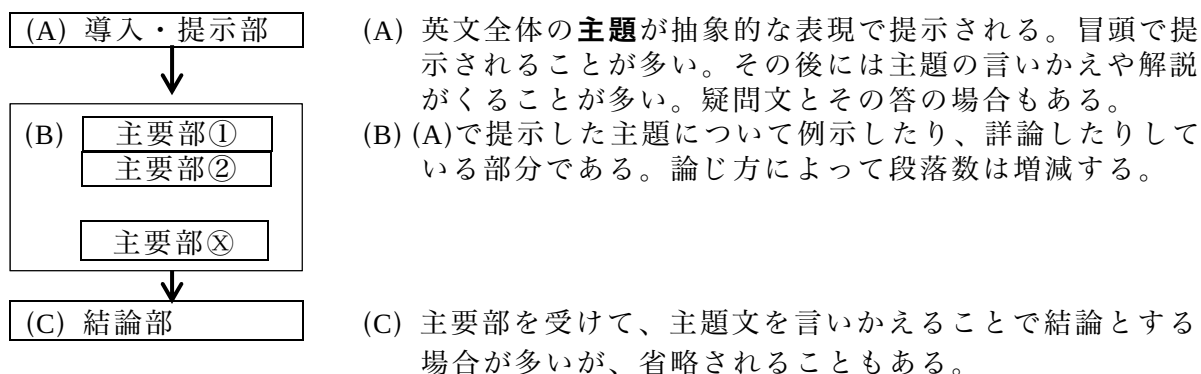
上記の例のように、関係詞を用いた節はコメントを付加するような感覚で補足的な情報を表したいときにも使われます。このような使い方では、コメントを付加する対象は語句だけでなく、前文の内容全体に対してもコメントを付加することができます。関係詞を用いた節のそれぞれの用法について、用途に応じた使い分けができるようにしっかりと理解しておきましょう。

Q3.4. 英文読解

個々の専門分野に関わるものであれ、TOEIC などの資格・検定試験であれ、「英文を読み解く」という作業は不可欠です。また、将来的に就職する際においても、英語をコミュニケーション・ツールとして考えた場合には決して逃れられるものではありません。本学においては主に2年次以降に開講される「科学英語」という講義において科学的な英文読解について触れていきます。

ここで、科学的な英文というのは論理構成を主とした説明文です(Q2.を参照)。したがって、大まかな文章の構成としては次ページの図のようになっていることがよくあります。

この図を見て分かるとおり、英文で述べられるであろう主題の手掛かりは導入・提示部を見ればよさそうですし、手っ取り早く結論を知りたいければ結論部を見ればよさそうだということになるでしょう。また、主要部においては、さまざまな意見を列挙したり、複数の段落を用いて論を発展させたり、具体的な例を挙げたりして、読者に対してこの英文で訴えたいこと・理解させたいことなどが述べられていく最も重要となる部分ということになります。おそらく、これまでの学習においてこのようなタイプの英文を読む機会は何度かあったと思いますが、上記のような点にはそれほど注意をせずに読んでこ



〔科学的な英文の一般的な段落構成〕

なかったかもしれません。まずは大学での英文読解への入り口として、このような英文の論理展開について理解を深めておきましょう。

次に、各段落間の関係を明らかにしたり、論の流れを交通整理したりするのに用いられる語句があります。代表的なものとしては、例示をするために使われる"for example"や"in fact"、結論を導くために使われる"therefore"、逆説的な内容を提示するために使われる"however"などがあります。ほとんどは熟語または慣用表現として覚えているかもしれませんが、それぞれが持つ機能をよく理解しておく、英文を読み解くときに非常に役に立ちます。今一度再点検してしっかりと理解しておきましょう。

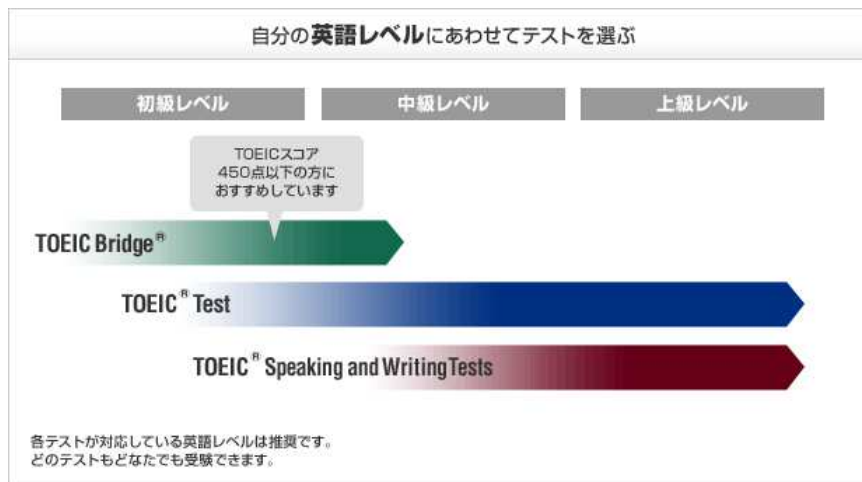
さらには、語などの表す意味も扱われている内容や専門分野によっては変わってくる場合があります。例えば、"body"という語は普段の日常生活では一般的には「からだ」ということを表す語として用いますが、科学のある分野では「(一定の構造を持った)物体」という概念を表す語として用いられる場合があります。また、数学や理科で使われている記号や文字も、その概念を表す英語(またはドイツ語、フランス語およびギリシャ語などのヨーロッパ諸語)に由来していることがよくあるので、そういったところにもちょっと気をつけておく、将来的に必要となるであろう語彙を増やすことができ、科学的な英文を読み解くときにも大きな助けとなるでしょう。ぜひおすすめします。

Q3.5. TOEIC などの資格・検定試験

英語に関する知識や技能について測定する試験の一つとして TOEIC という資格試験があります。これはいったいどのような試験なのでしょう。

この試験は正式名称を"Test of English for International Communication"といい、日本語では「国際コミュニケーション英語能力テスト」と呼ばれるものです。その人の持つコミュニケーション・ツールとしての英語に関わる知識や技能を測定する物差しの役割をしてくれる試験で、原則として「その人の持つ英語に関わる知識や技能のレベルが変わらなければ、何回試験を受けてもほぼ同じスコアになる」ように作成されています。このような特性を持つ試験であることや世界約 90 ヶ国で統一的に実施されていることなどから、就職や進学などにおいて資格の一つとして優遇されたり、または単位互換の認定を受けたりすることがよくあります。本学においても受験を推奨している試験の一つです。

それではもう少しこの資格試験の内容について触れておきましょう。この試験は指示



(TOEIC 公式ウェブサイト [<http://www.toeic.or.jp>]より)

も含めてすべて英語で行われます。テストの形式はリスニング(45分 100問 [Part 1～4])とリーディング(45分 100問 [Part 5～7])とから構成されており、解答はマークシート方式で行います。スコアは10～990点の5点刻みで表現されますが、試験の特性上「この問題は△点」というような配点があらかじめ設定されているわけではありません。また、スコアだけでなく、「レベル別評価(Socre Descriptor)」と「項目別正答率(Abilities Measured)」も同時に提示されます。この試験は主としてコミュニケーション・ツールとしての英語に関わる知識や技能を総合的に測定するものであることから、その国独自の文化的背景と関わりの深い内容や言い回しは除外されていますが、ビジネスに関わることや日常生活に関わることなどさまざまな場面を想定した問題が出題されます。さらに、この試験に関連するものとして、TOEICの入門的なものに相当するTOEIC Bridgeや、効果的に英語でコミュニケーションするために必要な「話す能力」と「書く能力」を直接測るTOEIC Speaking and Writing Testsといった試験も実施されています。

それでは、どのような勉強をしておけばいいのでしょうか。この試験はその人の持つコミュニケーション・ツールとしての英語に関わる知識や技能を総合的に測定するものなので、特別な勉強方法があるというわけではありません。まずは普段の学習が基盤となります。ただし、この試験の出題形式に不慣れであったりといったことや、英語を聴き取ることについて十分な練習がなされていないなどいくつか注意しておくことはあります。このような注意点についていくつか触れておきましょう。

まず最初に試験の出題形式についてですが、ほとんどの人にとっては初めて体験する出題形式だろうと思います。一部は大学入試センター試験やマークシート形式の模擬試験などで見かけたことがある出題形式と似ていると感じる箇所もあるでしょうが、指示がすべて英語ということもあっておそらく戸惑ってしまうことでしょう。本学では、TOEICを受験するためにより学習を深めたい人向けの「TOEICセミナー」という講座を開講しているほか、1年次の必修科目として開講される「英語」の講義中においてもTOEICに関する内容に触れることがあります。実際の出題形式に慣れるためにもこのような講座や講義を活用してみるのもいいでしょう。また、可能であればTOEIC Bridgeを実際に受験してみるということもいいかもしれません。TOEIC BridgeはTOEICの半分のテスト時間と問題数で内容も基礎的なものになっているものの、出題形式は同じ構成

に揃えられています。TOEIC という本格的な試験へ移行するための導入的なものでありますので、学習の選択肢の一つとして考えてみるのもいいでしょう。

次に、今までの学習の中で英語を聴き取る機会があまりなかったという人もいるでしょう。ラジオやテレビでの語学講座などを活用することで英語を聴き取る練習ができます。英語の音声を聞いて理解することを進めていく第一歩は「まず繰り返し聴くことで音に慣れる」ということです。ぜひ試してみてください。

さらに、TOEIC ではビジネスに関わることや日常生活に関わることなどさまざまな場面を想定した問題が出題されていると言いましたが、これまでの学習においても、例えば挨拶などのような会話表現については学習してきているのではないかと思います。こういったものについては再点検して理解を深めておきましょう。加えて、TOEIC で出題される問題において設定されている場面の傾向としてビジネス・シーンを想定したものが比較的多いので、関連する語彙についても注意しておく必要があります。

◆ 最後に～担当者よりあとがきに代えて～ ◆

最後まで読んでいただきありがとうございました。さて、ここで取り上げたことは今後の学習において必要となることのほんの一部です。しかし、どの事柄もとても重要なものばかりですし、前にも述べたように実際にこれまで学習支援センターに来室した人たちが比較的好く質問してきた事柄でもあります。大学での学習へとスムーズに移行できるように、また、実りある大学生活を送ることができるように、ここで取り上げられていることを再度読み返してみたい日々の学習に役立ててください。そして、学習を進めていて疑問点や不明な点が出てきたときには積極的に学習支援センターを利用してください。いつでも歓迎します。